利用者との「対話」を主とする新しいワークシートの試み 聖徳太子と国宝法隆寺展・家族プログラム『たんけん！はっけん！法隆寺！！』の取り組みから（報告）

鈴　木　有　紀

１．はじめに

愛媛県美術館では現在、利用者との「対話」（コミュニケーション）を柱に、展示そのものに工夫を施したり、利用者と展示をつなぐナビゲーター（ボランティア）の育成をスタートさせる等、展示室での利用者の主体的な学びを支援する様々な取り組みを開始している。この展示をめぐる利用者との「対話」という活動は、展示を「見る」ということが中心となる博物館において、利用者自身の展示に対する観察力と判断力を養うだけでなく、その考えをまとめる力（論理的思考能力）、そして自らの考えを言葉を駆使して表す力（表現力）、さらには対話を通しての多様な価値観の認知等を育むとされ[1]、近年、美術館に限らず多くの博物館で模索がはじまっている。そうした現状のなかで、当館では更に、従来よく見かけた一方通行的な知識伝授型とは異なる「対話」を主とした双方型の、より美術館利用者の主体的な学びに繋がるワークシート開発の試みも始めた。

この新たなワークシートの試みについては、平成15年度に開催した『国宝　鑑真和上展』におけるプログラム報告[2]の中で、現行のワークシートが抱える問題点と合わせて次回への検討課題とした。そして今回、平成17年度企画展『聖徳太子と国宝法隆寺』（8月13日～9月19日開催）において、前回の取り組みから得た課題を活かしながら新たなワークシートプログラムの開発に取り組むこととなった。

ここでは本年度実施した展示プログラム『たんけん！はっけん！法隆寺！！』について、その開発過程および展示室での参加者との対話の様子について報告を行い、本ワークシートの可能性と今後の課題について考えていきたい。

２．先行事例に学ぶ

まず、今回の取り組みにあたって多くの知見を得た先行事例について述べる。今回のワークシートプログラムは、現在東京お台場にある林原自然科学博物館Dinosaur FACTory（ダイノソアファクトリー、以下DF）[3]の展示プログラム『恐竜博士への道』がそのモデルとなっている。DFは“科学者の思考を観客と「共有」すること”を目指す、恐竜研究のプロセスがテーマの博物館である。『恐竜博士への道』とは、同館において2003年より毎年、春休みと夏休みの２回実施されてきた主に子どもを対象とした常設展示のプログラムである。（資料１）このプログラムは参加者が「指令書」と呼ばれるワークシートを手に博物館から出される質問―「指令」を解

資料１『恐竜博士への道』シート表（上）と裏（下）

きながら展示室を見学し、解いた答えを室内に常駐するスタッフに伝え、確認印をもらい、最後にすべての指令をクリアすれば恐竜博士に認定される―という、一見すると近年よく見受けられるスタンプラリープログラムのようにも思える。しかし、その中身は従来のものとは全く異なる。それは①質問の中身と、②質問に答えた参加者への博物館の対応の仕方にある。

『恐竜博士への道』の参加者は、まず、展示室入口で「指令書」を受けとりプログラムをスタートさせる。指令の数は常に２～４個に限定されており、今回がはじめてという参加者にも気軽に取り組みやすい数になっている。これは時に多すぎるのではないかと思う質問数のワークシートを手渡された時に感じる、あの疲労感にも似た感情を全く抱かせない。そして質問の中身―「指令」は、参加者に展示室内の標本やその他資料等の観察を促しながら、参加者独自の見方や考え方を引き出す「開かれた問い」となっている。つまり従来見かけたような、ある事象の原因と結果のみの理解―知識伝達の有無のみを問うような質問になっていない。そしてその次―この『恐竜博士への道』を最も特徴づけるのが、この「指令」に答える参加者に対する博物館の対応である。

DFではフロアスタッフの役割として、博物館内において、来館者の様子を見計らいながら展示のことについて来館者とスタッフがコミュニケーションをとるということが日常的に実践されている。しかし、この展示室での特に来館者と１対１になった時のコミュニケーションのとり方は、スタッフが来館者に話しかける最適のタイミングを逃してしまったり、反対に来館者が遠慮がちであったり、またスタッフから来館者への一方的な解説になりがちであったりと、その日その日の来館者によっても反応が違うため決して簡単なものではない。そのためDFは、新たなコミュニケーションの方法として来館者が気軽にスタッフに話し掛けて当たり前という環境を作り出した。それは、参加者が自らが考えた指令の答えを自主的にスタッフに伝えに行き、その「答え」を中心に展示を見るまなざしをスタッフや家族と共有しながら展示との「対話」を行う、という方法である。この来館者との「対話」について、DFの展示開発・運営にあたった同館エデュケーターの一人、井島真知は次のように述べている。[4]

（こういった方法で）いつもと違ったコミュニケーションができれば、見学者が考えていることをもっと知ることができるかもしれない。そして見学者の考えていることを知れば、今後の展示やプログラムの開発のヒントになるだろうと考えた。

指令を作るにあたって考えたのは、単に正解、不正解の答えあわせにはしたくないということだった。例えば「カマラサウルスの目の穴はどれか」という指令にしてしまうと、答えはひとつ。それが分かったかどうかを聞くことしかできない。それよりも見学者の興味の度合いや方向性に応じていろいろな発見や考えが誘発されるような指令を作りたいと考えた。ファクトスコープ[5]の話をヒントにしてもよし、展示物をヒントにしてもよし、ファクトスコープの解説を聞かないと分からないという指令ではなく、ファクトリー内のいろいろなものがヒントになるようにしたかった。例えば「発掘に行くにはどんな道具をもって行くのかな。それは何に使うのかな」という指令であれば答えはいろいろある。化石を掘るための道具でもいいし、砂漠での（研究者の）調査生活を支える生活道具でもいい。ファクトスコープを聞いていれば調査にどんな道具を使うかの話も出てくるし、それ以外に展示してある道具や写真を見て考えることもできる。（中略）しかし、こうした運営は指令の答えを聞くスタッフにかなりのスキルを要することでもある。答えを受け止めるスタッフに必要なのは、まず「よく聞く」ことである。年齢層もバックグラウンドも様々な博士挑戦者が見つけ出す、様々な回答に対応するためには、彼等が言おうとしていることは何なのか、じっくり聞いて理解することから始めなければならない。よくある失敗が、挑戦者の言葉を勝手に解釈して、こちらが伝えたいことをベラベラと話続けてしまうことである。スタッフの話は正しい解説かもしれな

いが、それが見学者の考えに基づいていなければ、無関係な説明をされた感じが強くなってしまう。例えば「ティラノサウルスは何を食べていたのかを知りたい」と見学者が言った場合、肉食なのか、植物食なのかを知りたいと思っていることもあれば、肉食であることは承知の上でどんな動物（どんな恐竜）を食べていたのかを知りたいと思っている場合もある。一見同じに聞こえる（見学者からの）回答にも、それぞれ異なった発見や疑問が含まれているのだ。博士挑戦者には、言葉による表現が十分でない幼児も多い。また幼児でなくとも、馴染みのないトピックについて話すときにうまく言葉にならなかったり、その人特有の経験に基づいて話すためにスタッフに伝わりにくいこともある。そこでスタッフはまず、展示のどこを見て（聞いて）、何を思ったのかをじっくり聞いて、それを共有する。そして、そこを起点に何と結び付けて話を発展させたらよいかを考えるのだ。

更に井島はこう付け加える。

博士挑戦者の中には、指令の答えが一つでないことに不安を抱く人もいる。いわゆる○×型クイズを期待しているからだろう。またスタッフからも、初級、上級など、指令にレベルを設けたらどうかという意見が出ることもある。しかしこれまでレベル分けは行わずにきた。つまり誰もがわかる内容の指令から、見学者の多様性に応じた答えが「不安なく」導きだされるようにすることがこのプログラムの基本軸なのだ。逆に言えば、そうした指令をつくるにはスタッフ側はかなり頭を捻らなければならないし、さらに見学者一人ひとりに対応するべく、先に述べたようなスキルを磨く必要があるのである。

そしてこのプログラムはたくさんの収穫をもたらした。人は一人で考えているよりも、他の人と話した方が考えが深まることもある。スタッフが「他の人」の役割をするのももちろんだが、親子や兄弟同士など、一緒に来館した同士が同じ指令に挑戦し、お互いの考えを話し合い、他の人の見方を知ることができる。スタッフも見学者からの予期せぬ回答に改めて標本を観察したり、新たに疑問が湧いたり、いろいろな発見がある。

リピーター挑戦者も多いこのプログラムは、実はスタッフにとっても発見の多い、やみつきになるプログラムとなっている。

前回、『国宝　鑑真和上展』の報告の中で、この新たなワークシート開発の可能性のひとつとして「開かれた問い」を取り上げることは既に述べた。今回の試みでは更にこのDFでの実践―展示室内で来館者との「対話」とそれらを促すスタッフの育成にも取り組み、この新しいプログラム開発に挑戦する。DFとは立地場所も展示環境も異なる愛媛県美術館の『聖徳太子と国宝法隆寺展』において、いったいどのような応えが利用者から得られるのだろうか。次章ではプログラムの開発過程と展示室内での参加者との「対話」の様子について報告を行う。

３．聖徳太子と国宝法隆寺展・家族プログラム「たんけん！はっけん！法隆寺！！」の開発

(1) 展示評価（evaluation）の試み

今回のプログラムは研究者の視点を持って展覧会運営にあたる、いわゆるキュレーターの役割を担う学芸員２名（西田、長井）と、利用者の視点に立ち、同じく展覧会運営にあたるエデュケーターの役割を行う学芸員1名（鈴木）の計３名のチームで、開発・運営を行った。研究者の視点についてはこの場での説明は省くが、この「利用者の視点に立つ」ことについては、例えばふだんから展示室内で利用者の行動の様子を把握していることや、展覧会の開催にあたって、研究者の視点を持つ学芸員とともに、展覧会をとおして観客に何を持ち帰ってもらいたいか、何を伝えたいか、それを伝えるにはどうするか等の議論を絶えずチーム内で行っていくことが挙げられる。今回はそれらに加え「展示評価（evaluation）」のシステムを取り入れ、利用者からのフィードバックを得ながらプログラム開発を行っていくこととした。この展示評価は、これから開発される展示やプログラムをよりよいものにしていく

開発の段階 （Stage of development）	評価のタイプ （Type of ewvaluation）	研究されるトピック （Topics to be studied）
企画段階 （Planning stage）	企画段階評価 （Front-end evaluation）	展示を見る人の知識と関心 （Audience knowledge and interrest） 展示のテーマ　（exhibit themes） 展示の内容　（Exhibit content）
準備段階 （Preparation stage）	製作途中評価 （Formative evaluation）	引きつける力　（Attracting power） 保持する力　（Holding power） 手順の力　（Procedural power） コミュニケーションの力 （Communication power） 感情的な力　（Affective power） 順序の決定　（Sequencing） サイン　（Signage）
設置後段階 （Post-installation stage）	批評的評価 （Critical appraisal）	専門家による展示のレビュー （Expert review of exhibit）
	修正的評価 （Remedial evaluation）	設置後の問題を解決する （Correct post-installation problems）
	総括的評価 （Summative evaluation）	人の流れ　（Traffic flow） 利用者による使い方（Visitor usage） 対象に対する態度（Attitudes） 関心　（Interests） 学習　（Learning）

資料２　評価の種類と使われる段階[6]

ためのひとつの方法である。日本では導入されてまだ日が浅いが、アメリカでは既に広く知られており、その手法は今も発展し続けている。代表的な評価の種類は次のとおりである。（資料２）

このようにこの展示評価は、厳密に見ていくと各評価の種類や段階、それらに伴う調査内容が細かく分かれており、この展示評価を本格的に取り入れることになれば、そのための調査項目の作成や人員等、かなりの準備と打ち合わせを要する。しかし、今回はこちら―美術館側が用意あるいは考えていることについて実際に利用者からどのような反応が得られるのか、それがプログラム開発にどう反映され、結果プログラム実施当日の利用者の経験にどのようにつながるのかを知りたいという思いから、まずは出来るところから簡単な形で利用者の意見を聞いていくことにした。

(2) 法隆寺についてのイメージ調査とワークシート（案）に対する子どもたちの評価

① 『“法隆寺”と聴いて連想すること、なんでもいいので教えてください」

そこでまず、企画段階評価として展覧会開催以前に、プログラムの主対象である小中学生が「法隆寺」についてどのような経験や、知識・興味・関心を持っているかを調べていくことにした。この時点―平成17年度５月の段階では法隆寺展の展覧会趣旨は既に決まっており、その展示構成についても大枠は固まっていた。しかし、この展示趣旨と実際に展覧会を訪れる子どもたちの興味・関心とはまた別である。調査の結果、子どもたちの興味・関心に何らかの傾向が認められれば、プログラムの開発はまずそこからスタートして、展示作品を使用しながら子どもたちと美術館が伝えたいことの間を縮めていかなければならない。

調査は5月上旬から中旬にかけて美術館を訪れた小学生5年生、中学2年生の男女各5名ずつ、また展覧会当日、子どもたちを美術館に連れて来てくれる保護者の立場の大人10名の計30名に対して実施した。結果は30名の法隆寺に対するイメージは小学生、中学生、大人ともそれぞれに重なるものもあったが、ある子どもは「柿食えば・・・」という地元愛媛の俳人、正岡子規の句を思い浮かべ、またある子どもは「日本最古の建築」と述べ、子どもも大人も「聖徳太子の建てたお寺」「百済観音」「エンタシスの柱」

「伽藍」「修学旅行で行ったけれど、大勢で入ってあまり憶えていない」「世界遺産日本第一号ですかね？」「漫画」等、みなバラバラなイメージを持っていた。そして教科書に載っているから知っていたという子と教科書を見る前からTVや本、インターネット等で知っていたという子どもの割合は半々であった。しかし、子どもも大人もみな、なんとなくは知ってはいるがその先はぼんやりしてあまり具体的には話が続かないという。このことは、実際の調査を行う前に試験的に同じ調査を実施した美術館の職員も同様であった。これは修学旅行等で訪れても集団行動であっという間に見学が終わってしまうことや、法隆寺の持つ歴史の長さや深さ、宝物の多様さがその理由ではないかと思われる。

前回の鑑真和上展ではその核となるイメージが利用者からもはっきりとした形で現れていた。しかし、今回の法隆寺展では利用者は法隆寺に対して多様なイメージを持っており、またそのイメージからあまり具体的には話をすすめることがない傾向が見られた。このことからプログラム開発を始めるにあたって、プログラムの内容は、①利用者であるその子ども独自の視点で入って来れるものにすること、　②プログラム終了時には「法隆寺」について、その子だけの具体的な経験を持ち帰れるようにすること―すなわち展覧会を経験して「僕の、私だけの法隆寺の発見」 が出来るよう、以上この２点について配慮を行いながらプログラムの開発をすすめていくこととなった。

②ワークシート（案）についての評価

次に準備段階評価として、出来上がってきたワークシート（案）が子どもたちのものとして使えるものになっているどうか、改善点があるならそれはどこかについて、実際のプログラム参加者となる子どもたちや保護者に試験的に使って見てもらうことになった。ただし、この時点では法隆寺展はまだ立ち上がっていない。シート（案）について試みてもらった子どもたちには、展示室の中の様子について仮想のイメージを持ってもらい、その上でシートが使えるかどうかを見てもらった。

企画展『聖徳太子と国宝法隆寺』は、1.法隆寺の宝物　2.聖徳太子信仰の美術　3．法隆寺と瀬戸内の3部構成で、聖徳太子と瀬戸内のかかわりを紹介しながら、飛鳥時代より受け継がれてきた法隆寺の文化財についてより深く親しむということが展示の目的となっている。そのためワークシート（案）の質問内容は各展示室の目的を考慮しつつ、シートに挑戦してくるその子独自の視点が活かされ、かつそこにある作品や資料が万遍なく活かせるような内容になるよう作成していった。そして出来上がったのが第一稿目のシート（案）（資料３―①）である。

この第一段階ではまず、保護者の立場の、よく美術館・博物館に来館している大人の方にシートの印象や言葉遣いが適当であるかどうか、言葉がきちんと流れていくかどうかについて内容を見てもらった。実はこの段階ではまだシートは言葉遣いや全体から受ける雰囲気等、お手本としたDFの「恐竜博士への道」の影響が色濃く残っている。見てもらった方からも「“キミ”という問いかけはどうしても男の子に限定してしまうような感じを受ける。」という指摘を受けた。また、「恐竜博物館の場合は来館する子どもも男の子が多いかもしれないから、これで良いと思うがここは美術館。だから問いかけの言葉も“～くれ”という元気なものではなくもう少し丁寧なものに変えてみてはどうか。内容はだいたいこんな方向でいいのではないか」という意見も頂いた。このため、この第一稿目については更に改善を加え、次に出来上がって来たのが第二稿目（資料３－②）である。この第二稿目のシートについては夏休みに入って美術館に来館していた小学３年生の弟と、中学1年生の姉そしてその保護者の一組の家族に試してもらった。

この第二稿目のシートについても、子どもたちと保護者からは様々な指摘を受けた。例えば「法隆寺の宝物」の部屋で考える第一番目の質問のところでは、保護者から「国宝と自分の宝物を比べる、というのはすぐにイメージが湧くかどうか」といった意見や「子どもたちは自分の宝物についてすぐにイメージできるだろうか」といった意見が出された。また、子どもたちからも「自分の宝物・・・？」とい

うように質問の内容につまる様子が見られた。そして、同様のことがシートを試してもらった他の子どもたちにも見られた。このため、この第一番目の質問は再度、内容を検討しなおすこととなった。そして第二番目の箇所では、展示されている聖徳太子の絵や像を「じっくり」見て、同じところ、違うところを探す、という質問文に対し、「これは、何かと何かを比べないと答えにくい質問だと思うけれど、このままではそれがわかりにくい。どうしていいかわからない。」という内容の指摘を小学３年生の男の子から受けた。また三番目の質問のところでは、今度は中学生の女の子の方から「瓦をスケッチしてきて下さい、とあるけどその後どうするのかがわからない。スケッチしてきて、だから何？という感じでスケッチをする意図がわからない」という指摘を受けた。この子どもたちからの指摘は、「これなら大丈夫だろう」と半ばもう完成だと思い込んでいた開発側にとって目からウロコであった。そして、子どもたちから受けた第二番目、三番目の質問の箇所について改善を行なって見ると、以前のものに比べ余分な箇所が消え、すっきりと解りやすい形に仕上がっていた。更に第一番目の質問については、キュレーターの役割の学芸員と「法隆寺の宝物」の展示で伝えたいことは何かについて再度協議しなおした結果、資料３－③のワークシートが出来上がった。

ワークシートの質問―指令は一つめが「文化財の保護」について子どもたちの考えを問うもの、二つめが「聖徳太子信仰」にふれるもの、そして三つめが法隆寺と伊予との関わりを知るために、伊予のあちらこちらから出土する法隆寺と同じ様式の瓦―「法隆寺式瓦」をじっくり観察するという３つのテーマで構成した。特に一つめのテーマ「文化財の保護」は、前述の子どもたちからの評価を受け、法隆寺展開催の趣旨について再度、展覧会担当の一人である西田の考えを掘り下げていく中で浮かび上がってきたものである。法隆寺は「文化財の保護」と実に深い縁を持つ稀有な寺である。それは飛鳥時代から続く聖徳太子信仰によって時の権力者の保護を受けたことから各時代の建造物、彫刻等が非常に多く残存していること、明治期の廃仏稀釈の折りにはその宝物を一括して宮内庁に納めることで散逸を防ぎ、それらがその後下賜されて現在の東京国立博物館法隆寺宝物館として広く公開されていること、また昭和24年に受けた金堂の大火災が契機となり、我が国初の文化財保護法制定の運びとなったこと、そして最近では世界文化遺産登録の話題が挙げられる。このように、法隆寺の宝物の展示を目の前にして、時代を超えて文化財を守り伝えていくことを次代を担う子どもたちと共に語らうこと、これは、とても大事なことではないだろうか。このような理由から一番目の指令のテーマは決定された。全体としては、作品を子どもたち自らの「目」で見て、考えることを促すため、指令は解説文を読むのはなく、どうしても展示を見なければならない内容となっている。そうしてその他の準備も着々と進められ、プログラムは実施当日を迎えていった。

(3)　展示室での「対話」

①スタッフについて

ここで、プログラム開催中、実際に子どもたちとの「対話」に携わったスタッフについて記したい。今回のワークシートプログラム『たんけん！はっけん！法隆寺！！』は、入口の参加受付と出口の修了証を渡す箇所に1人ずつ、対話を行う3つの展示室にそれぞれ2人ずつの計8人体制で日々の運営にあたった。加えてこのプログラムは終日の開催であり、スタッフの勤務体制も途中交代可であったため、開催中は平均すると常時15～20人のスタッフが運営に携わっていたことになる。そしてそのほとんどがボランティアとして美術館に携わっている人々である。

愛媛県美術館ではその年の4月より作品ガイドスタッフの養成を始めた。このガイドスタッフは主に常設展示室において、作品をめぐる「対話」を利用者と共に行うナビゲーター役の養成のため導入したもので、11月からの本格実施を目指して半年間の研修期間に入っていた。実は今回のプログラムはこのガイドスタッフの正規の研修日程には含まれていなかった。しかし、趣旨を説明し希望者を募ったところ40人程度いる研修者から実に20数名の希望者があり、実施前から熱心な空気に包まれていった。プロ

グラムの研修については展覧会開催前の一月半前から開始し、展覧会趣旨や出品作品等の解説に加えて、各指令の内容、それを受けての子どもたちと「対話」を行う時の留意点等について研修を行っていった。しかし、今回は館側もスタッフも全く初めての試みであり、また参加者である子どもたちからどのような反応が得られるか未知数の部分が多かったことから、最初から完璧な「対話」を目指すのではなく、まずは実践中に子どもたちの話に耳を傾けていく中でお互いにそこから一歩ずつ前進できれば良いと考え、当日に臨んだ。

②子どもたちとの「対話」

前述のとおり、今回のプログラムは愛媛県美術館では初めての試みであり、それだけに果たしてどのくらいの子どもたちが参加してくれるだろうか、シートは本当に当日の子どもたちに受け入れてもられえるのだろうかと不安の中で本番を迎えた。しかしいざスタートして見るとそれは杞憂に終わった。これはひとえにガイドスタッフの子どもたちへの一生懸命な眼差しがその最大の要因であったと思われる。来館した子どもたちは非常に積極的な態度でプログラムに参加してくれ、またその豊かな観察力で、始めは子どもと話をすることに不安と戸惑いを洩らしていたガイドスタッフに、新鮮な驚きと変化をもたらしていった。このことはその日のプログラム終了後のミーティングでの、子どもたちとのやりとりについて熱っぽく語るスタッフの様子から充分に見てとることが出来た。そして「対話」の回数を重ねるごとにみな少しづつ、落ち着いて子どもの話に耳を傾けるゆとりが生まれ始めていった。しかしプログラム終了後、課題点もみつかった。それは、指令の内容―特に１とその他の指令内容には問題の質の違いがあり、どの指令から始めるかについては、順番など設けずに子どもたちに任せた方が良かったというものである。このことについては、次回への検討課題としたい。プログラム中の子どもの発言をまとめたものについては資料４を参照されたい。

今回、この「対話」によるプログラムによってそれを体験した子どもたちに何らかの変化があったかどうかについては、残念ながら実施中の来館者調査及びその後の追跡調査も行っていないため、その効果について言及することはできない。しかし、ここに興味深い報告がある。それは、筆者が第一番目の指令で「対話」を行った小学5年生くらいの少女とのやりとりと、二番目の指令でガイドスタッフが行ったやりとり後の子どもの発言の中にあった。

一番目の指令で筆者がやりとりをした少女はまず、「文化財の保護」に関して、自分の考えを述べてきた。それは最初「大切なものは全部、地下にでも金庫を作ってそこにしまって置く」というものであった。少女は両親と来館しており、彼女の背後で両親がその発言を見守るような形で対話は進められていったが、その最初の意見を聞いて一緒に来ていた両親が笑った。少女は少しムッとした様子であったが筆者の「なるほど、ではどうしてそう思ったの？」という問いかけに対し、しばらく考えた後、「ああ、でも、ただしまっておいただけでは、他の人が見ることが出来ないから時々は出して（公開して）、他には（他の方法としては）偽物を作ってそれを見せる、という方法があるかも」という考えを返してきた。これに対し、背後の両親がまたもや笑いながら「ばかなことを言って」とからかうような調子で言葉をかけた。これにはさすがの少女もかなりムッとしたようで背後の両親を一瞬睨んでその表情を隠さなかった。しかし、ここで筆者が「あなたの考えはちっとも変じゃないよ、実はあなたの考えてくれた、大切な宝物の“偽物”がこの展示室には何点かあるの。この展示室の最初の方に仏様を描いた大きな巻物があったでしょう。それがそのひとつ。他の部屋にもあるよ。そしてそれは“偽物”ではなくて、“レプリカ”と呼ばれている大切なものなの」と語りかけた。途端、少女は「えっ」と驚き、続いて背後の両親も意外な様子で筆者と少女のやりとりを見守りはじめた。更に筆者はこう付け加えた。「それからね。最初の方にあった大きな巻物は“模写”というのだけれど、実は本物は昔、法隆寺に大きな火事があった時に焼けてしまってもうないの。でもそのちょっと前にその絵をちゃんと描き写していた人がいて、それが実はあの絵です。本物は燃え

てしまってもう見ることは出来ないけれど、ちゃんと模写していたものがあったから、私たちは今もその絵がどうだったか知ることが出来るんだよね」－少女の目の色が変わった。その瞬間、少女の考えと展示室の作品とが意味を持って本当につながった。少なくとも筆者にはそう見えた。

またもう一つの事例については二番目の指令のやりとりをしたガイドスタッフからの報告の中にあった。二番目の指令は「聖徳太子信仰の美術」をテーマにした展示室の中で、彫刻や絵画に表現された各時代の聖徳太子像を見比べながら、それぞれに同じだと思えるところ、違うところを述べる、というものである。報告を受けたのは小学５年の少年と、６年生くらいの少年である。ちなみにこの二人の少年の来館は別々である。二番目の指令についてガイドスタッフとひととおりの対話を終えた後、しばらくしてこの二人の少年はまだまだ話足りないらしく、スタッフに話しかけてきたそうである。その時少年たちから語られた言葉は次のとおりである。「他のと比べて思うんだけど、この聖徳太子（「聖徳太子坐像」摂政像・江戸時代）は、何だか徳川家康に似た感じがする。もしかして何か関係あるのかなあ」（５年生）「後で気がついたのだけど、ここにあるものはみんな聖徳太子が死んだ後、作られたものばかりだよね。それは何故だろうか」（６年生）

この子どもたちの言葉を受けて、思わず笑う大人もまわりにいたというが、人々の信仰の集める対象の風貌が、時としてその時の権力者に似せて作られるということは、よくあることであり、この少年の観察は的を得ている。また、指令２の内容は聖徳太子信仰に深く踏み入る内容ではなかったが、スタッフとの対話のあと、再度展示室を見渡したこの少年は自分の力で聖徳太子信仰についてせまろうとしていた。前述の少女の事例と合わせてこの子どもたちの姿は何を示すのだろうか。ほんの２つの事例だけでこの現象について言及することは難しい。しかし、これはつまりは子どもはとてもよく展示を観察しており、また、それをもとにスタッフと「対話」を行うことで更にその考えを少しずつ発展させていっているということではないだろうか。この「対話」にはそういった本来子どもが持っている自らが成長する力を引き出す力があるのではないだろうか。

余談ではあるが、前述の筆者と少女が対話を行った模写や模刻と「文化財保護」の関係に関連して、展覧会終了後スタッフ間で課題点が挙がった。それは、法隆寺展を訪れた多くの利用者のアンケート上に、出品された展示の多くが「本物」ではなく「模写」や「模刻」であることに対する不満の声が述べられていたことである。実はこの模写や模刻と「文化財保護」については、プログラムの実施時や学芸員のギャラリートーク時には学芸員からその関係についての話が語られたが、展示室内の解説パネルやその他資料中にはそのことについての記述はなく、そのため多くの利用者に誤解を生む結果となった。このことを受けて、仏教美術の展覧会を見る機会が多い都市部と、地方の違いを指摘する声もあると思うが、筆者はそれは違うと考える。「模写」や「模刻」、また「レプリカ」という博物館界で通常、当たり前として使用され理解されている言葉は本来特殊なものである。またそのことと「文化財保護」の関連性について、いったいどのくらいの利用者が経験上、知り得ているのだろうか。答えはかなり小数であろう。

近年、博物館の展示では難解・盛りだくさん過ぎる解説文への反省から専門用語・文章量をなるべく簡潔にする方向にあり、また特に美術館では利用者に対し、解説文を読むのではなく作品を見ることに主眼を置いて欲しいとの観点から必要最低限の文章量となっている。今回の法隆寺展では美術館から利用者へのメッセージの奥底には「文化財の保護」についての想いも含まれていた。しかし、結果として誤解を生んでしまった。

今回のプログラム開発にあたっては、冒頭部分で紹介した展示評価の一部分を取り入れることを試みた。しかし、将来はプログラム開発のみならず、その基本となる展示全体のそのものについても、この展示評価を取り入れ、美術館が伝えたいことと、利用者の想いとの間を注意深く検討・検証することが今後、必要になってくると思われる。

４．次回に向けて―「対話」の向こうにあるもの

展覧会開催中の8月の土日の計6日間開催されたプログラムの参加者数は合計567名、内、途中でリタイヤした子どもが10名と、当初の予想に反して多くの子どもたちの挑戦があり、スタッフ側も疲れの中にも充実した日々を過ごすことができた。プログラムへの参加や続行については、それぞれの都合もあるためあまり無理強いはせず、子どもたちの自由意志に任せる形で運営を行った。しかし、このリタイヤした子どもたちの理由については、筆者が直に見聞きしたり、現場のスタッフの話から感じたことを合わせると、その多くは子どもたちの引率者である保護者に時間がなかった（このプログラムでの子どもたちの展示室内の平均滞留時間は１時間であった）というものと、もう一つは指令を解くために展示室の作品を見るのではなく解説文を必死に見ていた、というものと、あと一つは保護者の方が正しい答えを求めるあまり「うちの子には出来ない」という態度を子どもにとったことがその理由であったように思う。この、美術館で特に子どもと過ごす時間についてはまた別の機会に譲るとして、後者の「モノではなく解説文を見て一つの答えを探してしまう」傾向と「うちの子には出来ない」と決め付けてしまい、子どもの思考を断ってしまう保護者の態度については、やはり現在のワークシートが抱える問題のひとつとしてそれを実施する美術館や博物館はもっと真剣に受け止める必要があるように思う。筆者は、一つの答えを求めるシートが必ずしも悪いとは思わない。しかし、そのスタイルの繰り返しは果たして真にモノを「見る」ことにつながるのだろうか。知識の伝授には受け手とのバランスが重要である。モノを自分の「目」で見る時、子どもはすばらしい観察力を見せること、また、それをもとに考えを様々に発展させ、ひいてはそれが彼らの成長につながっていくことは多くの事例からも報告されている。このワークシートの目標の立て方、開発の仕方、発問の在り方、子どもたちの考えのフォローアップの在り方について美術館・博物館は今一度その中身を点検する必要があるのではないだろうか。

「見る」ということと「知る」ということは異なる行為である。もっといえば、きちんと「見る」という行為なしに、本当の意味での「知りたい」という欲求は生まれてこない。しかし我々はこれまであまりにも性急に利用者に応えを求めるがゆえにこの当たり前のことをおろそかにして来なかっただろうか。そして美術館・博物館は「見る」ことを行う究極の場所である。「対話」をとおしてモノを「見る」ことの行きつく先にあるのはモノとの対話、人との対話、そして最後は自分との対話である。自分との対話とは自分自身と向き合うということである。「見る」という行為はつまるところ自分自身を映しだす鏡のようなもので、そこには見たいものも見たくないものも全て合わさって、自らの姿が映し出される。それを目の当たりにした時、もしかしたら足がすくむような想いにとらわれることもあるかもしれない。見なければ良かったと後悔の念にかられることもあるかもしれない。けれども、その姿はあくまでも現時点での姿であって、自らのその状況を確認し、気づきを得た時、人は変わることができる。人間は成長することができるのである。

「対話」をとおしてモノを「見る」という方法を筆者は絶対のものとは思わない。しかし今のところ、美術館・博物館を訪れる利用者が中心になれる唯一のものかもしれないと考えている。そしてその奥はとても深い。

冒頭でも述べたが愛媛県美術館でのこの「対話」の活動はまだ始まったばかりである。そしてガイドスタッフの人々と「対話」の経験を重ねる度、痛切に感じるのが、これは生半可な心構えでは決して続かず、利用者の心にも何も届かない、ということである。「見る」という行為はとてつもなく深く、広大な地平を内包している。そのことに敬意を払い、真摯な気持ちで向き合いながら、この「見る」ことの豊かさについて、これからも美術館を訪れる人々に伝えていきたい。

註

（１）上野行一監修『まなざしの共有―アメリア・アレナスの鑑賞教育に学ぶ』（2001、淡交社）

（２）拙稿「国宝　鑑真和上展　小学生のための展示プログラム“あきらめなかった人の顔”の実施から(報告)『愛媛県美術館研究紀要』第3号（2004、愛媛県美術館）

（３）2002年9月に東京有明のパナソニックセンター内に5年間の期間限定で開館した恐竜研究プロセスをテーマとする林原自然科学博物館の実験施設。2006年5月の閉館後は本体である岡山に居を移し、2009年頃の博物館開館を目指す。

（４）井島真知「見学者と交流するしあわせ・だから“博士”はやめられない、」『文環研ジャーナル・フリートーク』（2004、文化環境研究所）

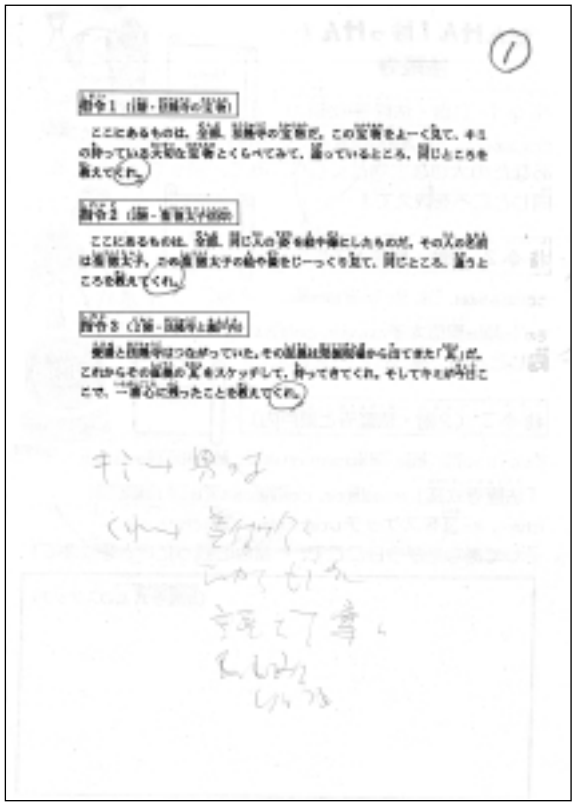
（５）DFの見学時に一人ひとりに貸し出される（入場料に含む）携帯情報端末（PDA）のこと。館内にあるスタンドに近づけると、その展示室に関連した恐竜研究の話等が聞こえてくる。

（６）琵湖博物館研究調査報告　ワークショップ＆シンポジウム　博物館を評価する視点　琵琶湖博物館・滋賀県博物館ネットワーク競技会編』17号（2000、滋賀県立琵琶湖博物館）pp．17

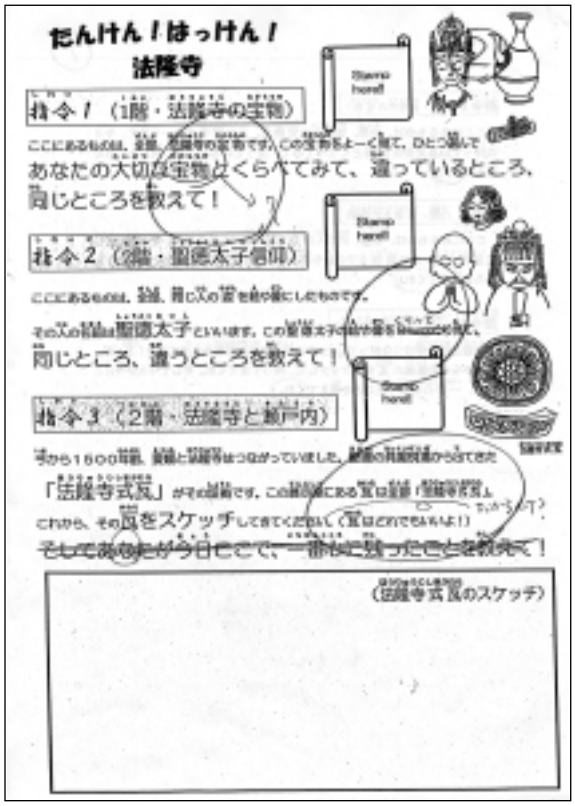
謝辞

「たんけん！はっけん！法隆寺！！」の開発・運営に際し、助言いただいたダイノソアファクトリー・エデュケーターの井島真知、雨宮千嘉、「指令」の開発に関し、展示趣旨について何度も検討しながら協力・助言を受けた当館学芸員の西田多江、長井健、ならびに展覧会場の現場で日々、子どもたちと真摯に向き合っていただいたガイドスタッフのみなさま、その他、展示評価の試みに協力してくれた多くのみなさまにこの場を借りまして心よりお礼申し上げます。

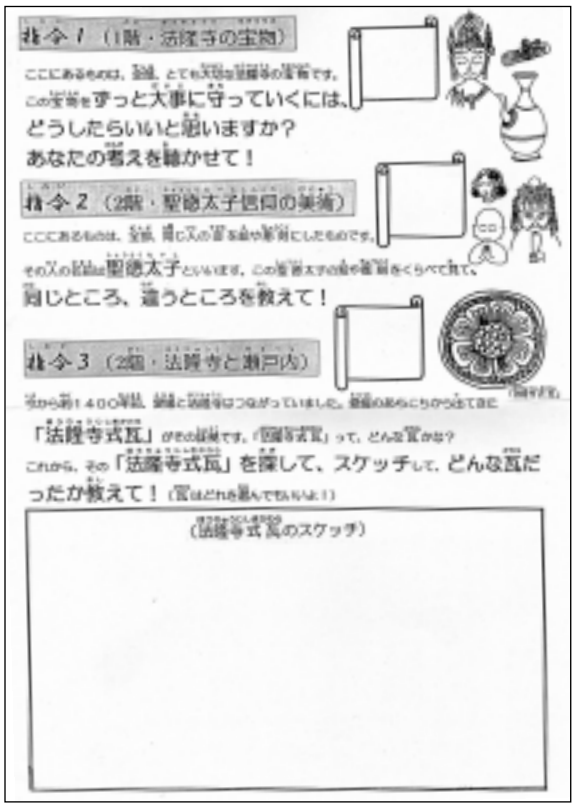
資料３　ワークシートの変化



①ワークシート第一段階



②ワークシート第二段階



③完成稿　表（左）と裏（右）

資料４　展示室での子どもたちとのやりとりから

指令１「法隆寺の宝物」

＜保存に関する意見＞

・光をあてない
・なるべく、触らない。こういうガラスケースに入れておく。
・地下に大きな金庫を作って、そこから絶対にださない。
・（付け足しの意見）本物は金庫に入れておく、みんなに見せるのは偽物（レプリカ）を作って出す。
・垂飾を見て→水をかけない
・木製品→乾燥材をいれる。
・かびを防ぐ
・大切にしまっておく
・ローラーをつけて、火事になったらすぐに運び出されるようにする。
・法隆寺に避雷針を立てて、雷が落ちないようにする→火事になるから

＜普及に関する意見＞

・昔、こわす運動があったのなら、今度は壊さないようにする大切にする運動をすればいい。
・多くの人に見せて、大事だということを知ってもらう。
・みんなに広く知ってもらう。日本だけでなく海外にも持って行って、外国の人にも知ってもらう。
・世界中の人に守ってもらう。

＜環境づくりに関する意見＞

・法隆寺のまわりの環境も大事にする。整えていく。

＜その他＞

・地蔵菩薩立像に手を合わせている子（地蔵菩薩が人気）
・夢違観音が一番好き。この仏像はとてもかわいい、と感想を言う中学生の男の子
・一生懸命、勇気をふりしぼって話しかけようとするが、スタッフの前で固まってしまう子、言葉に出来ずに黙りこんでしまう子
　→ボランティアスタッフの補助「この宝物の中でどれが一番好きかな？」
　「キミの宝物は何？」などの話のきかっけとなる言葉かけを行い、話を引き出していった。一方通行でなく人が間に入る醍醐味。

指令２「聖徳太子信仰の美術」

＜同じところ＞

・孝養像と水鏡の御影（ともに鎌倉時代のものである）
・水鏡の御影と聖徳太子四天王像の太子の姿が似ている。違うのはまわりに四天王がいるだけ。
・視線がいつも同じ、厳しい表情をしている。
・いつも「えらい人」な感じ
・いつも手に何かを持っている
・大人になるといつも頭に何かを被っているのが同じ。子どもの時はない。
・いつも真ん中にいる。
・赤い色の服を着ている。
・聖徳太子の表現の仕方（服装、たたずまい等）はどの時代もなんだか似ている

＜違うところ＞

・時代ごとに、表現の仕方が違う気がする
・聖徳太子二王子像と他のものを比べると太子の顔つきが違う
・子どもの時と大人の時とで髪型が違う。
・子どもの時と大人の時とで持ってるものが違う
・服装が違う
・二歳像は合掌してるけれど、他はみんな何か持っている。

＜その他＞

・違うところはすぐわかるけど、同じところは難しい
　→ボランティアスタッフ補助「例えば、手には何をもっているかな等」
・この中で二歳像が一番いい、連れて帰りたい。
・聖徳太子坐像（摂政像・江戸時代）が家康に似た感じに作っているのではないか。
・聖徳太子が死んでから後にたくさん絵や彫刻がつくられているのは何故だろうか。

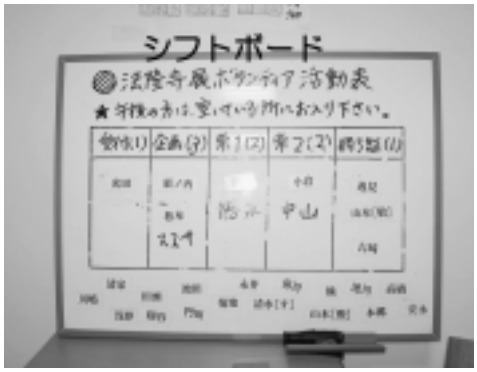
指令３「瀬戸内と法隆寺」

（やりとり）

・八葉蓮華の確認
　→なぜ八枚なのかの説明
・法隆寺の建物のどこに「法隆寺式瓦」があるのか知らせる。
・ハスの花について
・瓦の展示場所と「瓦」がわからない子どもが多い→ボランティアスタッフが瓦のある場所を知らせる

資料５　展示室内の様子

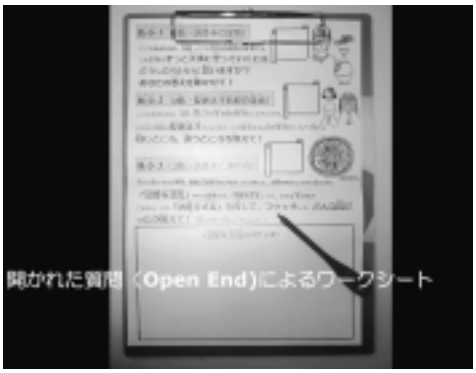
① プログラム「たんけん！はっけん！法隆寺！」



⑤ スタッフのシフトボード（２交代制）

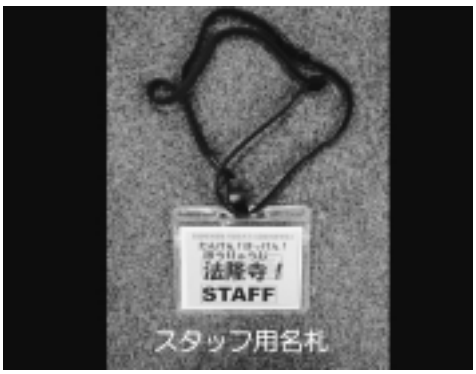
② 指令書

⑥ スタッフが携帯している認印



③「開かれた質問」によるワークシート

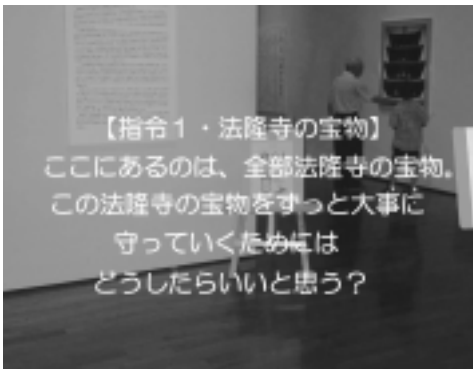
⑦ ３つそろうと法・隆・寺となる



④ スタッフ用名札

⑧ プログラム参加受付（入口）

⑨ 勧誘の様子



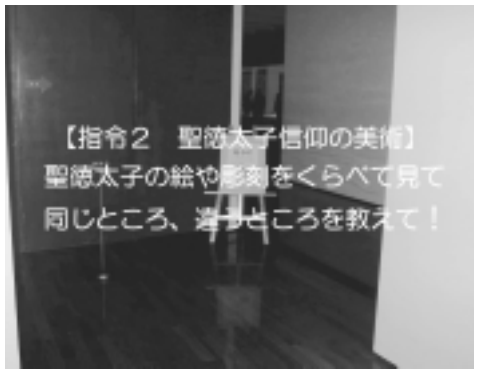
⑩ 第一展示室の指令

⑪ 案内サイン（ワークシートと同色で統一）

⑫ 第一展示室「法隆寺の宝物」の数々

⑬ 第一展示室の様子

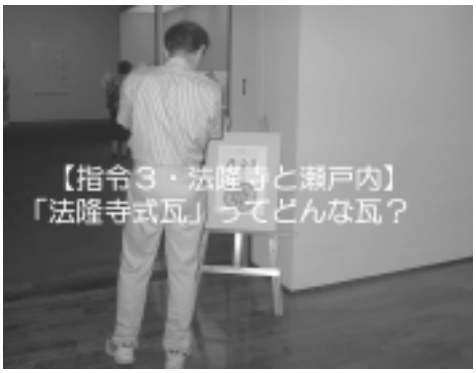
⑭ 同じく第一展示室の様子



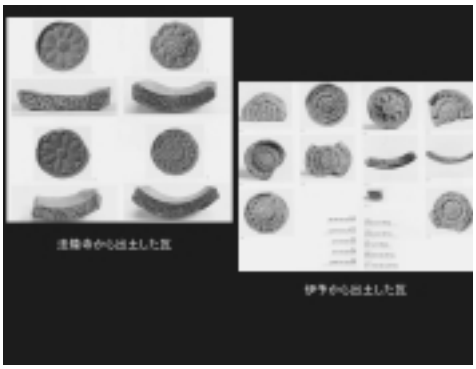
⑮ 第二展示室の指令

⑯ 第二展示「聖徳太子信仰の美術」の数々

⑰ 第二展示室の様子



⑱ 第三展示室の指令



⑲ 第三展示室「法隆寺式瓦」の数々

⑳ 第三展示室の様子

㉑ 同じく第三展示室の様子

㉒ 終了した指令書の一例

㉓ プログラム修了証発行所（出口）

㉔ 修了証シール

㉕ 修了証授与の様子

㉖ 心をこめて渡します

㉗ おめでとう！

㉘ プログラム終了

資料６　プログラム広報チラシ

資料７　修了証シール